俳諧七部集　後猿蓑　四

911.3
八
4

續猿蓑集巻之上

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉

春のからすの畠ほる声　沾圃

初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧

内はどさつく晩のふるまひ　里圃

きのふから日和かたまる月の色　沾

狗脊かれて肌寒うなる　蕉

渋柿もことしは風にふかれけり　里

孫が跡とる祖父の借銭　莧

脇指に替てほしがる旅刀　蕉

煤をしまへばはや餅の段　沾

約束の小鳥一さげ賣にきて　莧

十里ばかりの余所へ出かゝり　里

笹の葉に小路埋ておもしろき　沾

あたらしくつる門の書付　蕉

洲之ら縁先湯清なき撈塀を　里

やつゆく嵯も江京の名つれ　莧

みる腔るおもふゝ花の心あひて　蕉

えんりにころぶか梅のたへ口　沾

春雨ゝ男くま川落札ら終なま　莧

伊勢の下向にべつたりと逢　里

長持に小挙の仲間そはひしと　沾

くつゝると吹く空の晴るあをやぎ　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里
槲の角乃ちてぬけ穴　莧
隕むしの牛に借をきらふや　沾
なれぬ娵にもらす内證　蕉
月待に傍輩衆のうちそろひ　莧
籬の菊の名乗さま〳〵　里
晴れて来て露も梢もさびしく（のまゝ）　沾
伴僧をしる鶯乃わた　蕉

剃やうれに長力坂のみゝの風　里
すゞしさに置のことわりきる　莧
引立て咄すに縁ける出まは[illegible]ゝき　蕉
ち川と火入に押とれ薫　沾
花かゝをもや試しねまちのあやく（られて）　莧
漲かしらのちるかはるかふりて　里

雀(カラ)の字や揃ふて渡る鳥の声　馬莧

てり葉の岸のおもしろき月　沾圃

立家を買て来ぬる秋暮て　里圃

鴨川しかる入江のさゝく月酒　莧

霧ふまる其修らふ子とも不ららへ　沾

遠きまいてふの洗足　里

悔しきもり子の一歩のたゆるとなりひ　覚
譲状書んでなまるありさる　沾
よそさら旅葉茶などの病気きうし　里
さ嶋りあつまる國方乃客　覚
何事もなくてめでたき絶翁道　沾
凡よそめすかるお牖の横の月　里
彦祈　秋の作名に作之て　覚
莚花のさいまと無尾呼れ　沾

隠ちる伊勢丸辛洲のかゝし蘂り　里
美装書きるを紀やらぬ一位　覚
信来もあかりて霊きし盃　沾
来ち静かなる草凡傳纏　里
鶯の鄰あまき雪掃揃し　覚
志なゝ合点て拂ゐて居る　沾
身しにえいうる紀夫を中無く　里
三済　貌髪の出番のえいさや　覚

汁の実みこする茄子のも盡て　沾
あらしもまきすり刈てと来　里
にしに寺の指圖をさまし　莧
蔓のおさ乃あとさて淋しき　沾
膝ろりてよさえつぬ小窗　里
早下しして庭よい籾阿ふ　莧
肌入て秋にかしりり菜の月　沾
彭よふちるくたら芭の露　里

汁盆を寶の母飛あとも向て　莧
乃付て祈り お納乃こ内　沾
座のまれき帷子時のさとひ物　里
ゆすて氣味よき杉蒲の風　莧
花のうけ榮氏立離この鮮くり　沾
あら國の土のかりくうけおめ　里

はら〱と寝覚りすゆる山嵐ぞ菊　里圃

冬のまさきの霜なから飛　沾圃

大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉

上下ともに新葉の秋　馬莧

断かに月見の衆の集も誘　沾

落ちらしと通る須　里

うき旅を照らしつれ立渡り鳥　里
き明ころし明もうつるゝ　覧
米舟の花の中より浮つときて　佐
梅の侍へ行をききてけり　里
西堀になりて明るも出家　覧
こまかなを膳にあへめ仕業　佐
麦抽の浅漬はゝおろし重　里
乃ゑのあつきをそめりともきね　覧

無息彼の聲り行鳴極りて　莧
沾々行板も楓わらひく　沾
姐の鏡ゟみさへうけなし　里
関刹で寐覚よんで覚しけり　莧
牀前を猿瀬の鬼郷挿もて　沾
よきこせ川の虫やすめ日の親　里
華の笑ふよくあくきれの浅ちまり　莧
作弱く気つらふ綿とりの箱　沾

うき旅出膝とつれ立法り鳥　里
色明ころし明もつらそく　寛
米舟の花の中よりほつとして　沾
梅の侍へ行をきもてけり　里
両親となりて世をも出家 さよ　莧
こまかんな膳のあしあ嫁菜　沾
素袍の法縁はしくおろし盃　里
けふのあつまきそくめりともきね　莧

猫をとふ藪の中より絡緯の声　沾
おもき人のいひちらされし　里
火燵の火いけて勝手をしまひを　芭
一石ふかし雉乃米　沾
折しも寒月の起て寝れ　里
御に加減乃ちらふ夜寒さ　芭
有露よてらしゐ雲と咲てらる　沾
おもひのまゝに振て居眠かく　里

手拂に婿をやりて婿のさゝ　芭
寒家の名をとらて住居　里
花のあと躑躅のそこにとろい　沾
寺のひけふる山際のまち　芭
みなおりを近くにみしかりせの暮　沾
一面借てあくる家風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃

日は寒けれど静なる岩　芭蕉

水かるゝ池の中より道ありて　支考

篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鶏があがるとやがて暮の月　蕉

通りのなさに見世たつる秋　考

盆まへ一荷で出てきる飴の魚　然
其三條の瓣を打きりまきり　蕉
鷺つ見て西川をも世にはありけれ　考
中国よりの状のきれたる　蕉
納日のはえさえや振舞　然
一言は拍鐵か先て出る比　考
きさんけなまぐさの比の榧楓　然
山に門ある花の月　蕉

神あし畑の人のうけまゆを　考
かへ條光る須り小鶺　然
足でまる続く春芽花の咲かで　蕉
蘭拮ひとりはいとく不蔵は　考
そら風の又押よ知他になり　然
わらぢに脈をちるゝ隣　蕉
怪呼の心得でとな危器し　考
喧嘩乃さとも無さとそして　然

あせ川なはゝ二ヶ丸き篝の鐘　蕉
雪くさかし中のところを　考
まろ種の家掛出皆出家衆　然
奥の世並せ丘ノ国の他　蕉
酒よりも肴のやまたふ月見して　考
赤鶏頭を庭の面　然
定らね娘のこゝろ定川れ　蕉
露汗のと浦ると能くさの菊　考

色鶏を戻くまと拗尾柁の風　然
大工つかひの奥の宮ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて帰る也　考
しらめて帝の中を押あふ　蕉
けあくり酒魚花のけもなくて　然
鴨の油のまだぬけ無　蕉　考

今宵賦

野盤子　支考

今宵は六月十六日のそらみづにかよひ月は
東方の丸山にかゝげて衣裳は湘水の秋
をこゝろにさそふ　これを今宵のたのしみとして然り
尊卑の席をくばりて老は少し敵て
こゝに隣人こゝしに涼しくして野送里
ひら議おのおの毎にしかくりたる隣人さく
さゝれ人を興をし先むつれあく緑まで

[stamp]

なにはよ京のめぐくしかしかん住侍
のぬるのあつらひぬの鳥羽をとほしらさ
三子を待へぬる何度い條川のあふるに四
条のまで秋きなき条てならしいころ月
さつきしのあかいを語りて伊賀のなかり
父母のお墳をとふらひ洛の嵯峨山に
掠餘して紫野祇園の涼をみも夢くよ
夜かくてやけりよ秋をすぐれ給ふ

思ふよさすか湖の納涼もさそはれく
さてすぐ三四里の田を渡て京に鞋の
驚をぬく所へ宮川の茶店に休をなるし
とて何あり俗なり俗にして何より俗なる
ものなきこの京の何かしらの加茂川の
岸にむかいておかしきよとし深くすい
すこしも深き川味なくして人にあふるく
あし半生なつかしからし人しのさし
あきてたちよ見て行れさおのつからよ

ろこゝろ色への縁よろひておもへ次第
峰て肩ゆかゝふまれ体やましで意気のる
比まで何度もたちやくの方へと心てゝしやり
されし去支ちそれ路の方に行ところ
出て附句の比まち之せなとも和母かなり
きゝ潮の名残のやうてそゝしみえ
わゝれて江州のけ何をひそにおろしろと縁まち
のゝ前ま墓のいゝく眺まいはこころ
ら後たゞ前の真宴何そ何ゝしゝさ編あらん

そゝろに酔て邪をるとのあゝま罰盃の身
のみたゞのまきんとたゞみれあひぬ

芭蕉

一方の色や岩て晴し泣ゝし抽

落ちてそゝつくや蓮の根まれ　世部

営るいさうての邪にまるゝ入て　川高

たちさ草露よ又枝却し也　惟然

月影の雪もちらばる雲の色　支考

きゝみて待まある駕かな　芭蕉

猪を狩場の外へ追にがし　翠
山から石に名を書て遣る　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然
鳶で工夫をさする照降　考
おれが事哥に読るゝ橋の番　蕉
持仏のかほに夕日さし込　翠
平畑に菜を蒔立したびら降　考
秋風さそふ二ッの庭風呂　然

馬引て賑ひかゝる月の影　高
尾張でつきしものゝ名になる　蕉
餅好のことし死花にあはれて　翠
正月そのく襟もよごさず　高
春風に普請のはもやいくゝりや　然
家かし村へねつけちうしき　考
笠々ね簞も箸も口きいて　蕉
何その時も出体よかる　翠

笠はらちて橋に付ちるちちさゝく岩
言

蔵こいちる神月哉
蕉

おもわやく踊光みとつ矢木の町
其角

降の日和よ雪乃気也
然

天乃てらく手綱を母酒のはりな
暑

爰にかゑのむかし都へあらくち
言

封付し文菊草ちる月の暑
蕉

そろしありくく金の上蕨元
其角

雪籠一ち世呂の庵の阿弥所
然

ちる附きあくる袁　一国
芋

尽の中子姥をえいく阪橋の上
言

たゞむ待のこんよ宇佛る
然

盡なる乙他のも扉柳しよもて
其角

揉うけつくしさぬ桃の下
高

續猿蓑集巻之下

春之部

花　桜

温石のあかるゝ夜半やはつ桜　沾圃

霞時ゝに又ミせ月の出ごゝろ　其角

顔に似ぬほつ句も出よはつ桜　芭蕉

ちる道や木の股くゞる花の山　洞木

角いれし人のかしらや花の友　丈草

花散て行へる軒のやすさゝ哉　洒堂

高貴なる酒屋にあそひて文君
か爪音も酔のまきれに思ひ
いてし侍りし

酒部屋に琴の音きく宮の花　惟然

賭にして伐られけりちる糸桜　支考

人の手もかく霰しも川桜　沾徳

くもる日や野中の花の北面　猿雖

七川より花さくよ相は女中也　陽和

へる所都ふかくる花も川桜　乙州

咲花をあつかはし老木也　木節

家屋やあからさまに花も川桜　沾荷

一の膳やさそう過ぎし鯛の糜　子珊

蔓生の葉方にあらしく桜哉　卓袋

田家

蕪菁の名知やさんか宿桜　李里

咲ける花や飯菜又十石　桃首

山門は花となりし木の始より　一桐

なかれ木の根やあらはるゝ花の瀧　如雲

花笠をきせて似合ん人も誰　其角

ちられやうに出床あまた花の暮　少年 一鷺

ねり尽し種の芽かゝるや軒の花　卓袋

一日も花見のあてや旦那寺　治圃

八重櫻京にも移るちゝの名所　全

若菜

濡縁や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪

ふるの岸やむら沼の若菜に船　曲翠

夕波の船にきこゆるなづな哉　孤屋

一かぶの杜丹も交る若菜かな　尾頭

梅　附柳

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

浅さゝれやたちる棚もせかの花　野水

守梅のあそび業なり野老賣　其角

里坊に雉きくや梅の花　昌房

投入や梅のあるじは落の花　良品

一痛僧の庵よそれ梅のさかしれ　曽良

あらし記あさ蓑まくかし梅の花　万乎

梅雪や梅の隙よそし下駄の跡　魚衍

さらし梅や嵯峨もしくみ家もなきあり　千川

霞所や梅のにほひをよせて談ん　大舟

天神のやしろ梅に清て

日かけを妻と折るや梅の離これ　遊糸

子規し北鯨のなりや世あち柳　千那

時しらずあるうちなり川やかな哉　意之

ちる道を数へちるや古柳　江東 李由

青柳の走れくく也や馬の曲　丸江

鶯をうけてる梁の泊ろ柳の花　巴丈

鳥　附魚

鶯よもちからから涼塵の中　其角

うくひすや野辺娵越の風呂あかり　史邦

鶯に手もと休めむながしもと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

鷄雛もたしげなく雉のあはれかり　去来

春雨や蓑にはらかん雉子の聲　洒堂

駒鳥の月のあとやも川に根か　傘下

こ傳こゝの花も寄似合しき良鷄　長和

燕や田をわりかけし馬の鼻さき　野童

巣の中や身を細して親や燕　少年 峯嵐

雀子や姉のそらし雛の棧　槐市

縄うらになりさく雀乃子飼か　何瓢

引鴨やあら磯にはなれての機情　駒幕

芳野西河乃瀧

鮎の子の心すさまし瀧の音　土芳

かけろふや芦よりちらつく小鮎か　圃水

しら魚の一かたまりや汲ながら　子珊

白魚のしらうよ鳴もはかなきへし　山鋒

深川にあかり出て

しら魚をふるひ寄たる四手かな　其角

まちる子

かゝりても菰かる川は浅やまの子よ　正秀

薬そなや松にかけたる鐵の道　以筋

まちの鄙や咲れの草よこあれりん　羽紅

川淀や淡をやしなふ蘆の角　猿雖

雪の岡まろや土筆の出しから　園指

味ひや梅の花よりあかうなる　車来

藪ならし咲添かたの男あるく　荒雀

蝶一おりこゝろひ落れまさる外　馬莧

流まくれ土堤の切目や落の端　拙候

梅ちしみあれ形に焼され土大根　乃龍

早蕨や笠とり山乃杉くゝて　正秀

こゝろ新兔のあかひに肥るこゝちかな　夕可

月の夜は猫の抓む尾棕櫚葉かな　一桐

蒲公英や手まりの色くらべ花さかり　圃蒲

猫恋　附胡蝶

恋ぬれや月にかなしき啼猫の恋　揺丸

うき恋によくめくてや猫の盗喰　支考

おもひ寄る孔雀をかける野猫かな　已百

白月志川かや

ゆすりても翅を動く胡蝶か船　柳梅

衣かえの袂やさゝき胡蝶の船　惟然

蝶の舞おつる様よく流るゝ　闇指

風吹よ舞の中より小蝶かな　室以

三度飛して花にもつれし胡蝶かな　雪窓

春鹿

振おとしけりや廣沢の鹿の角　沢雉

春耕

好者のちゝれおてもさゝくる麻　木玄

崩れや笠縫ところ春月ね　此筋

千刈乃田をかへすや鶏鳴人　洒堂

桃 附椿

白桃や雫も落ず水の色　桃隣

金柑はまだ盛なり桃の花　介我

伏見かと菜種の上の桃の花　雪芝

桃はなしの中をながるる桃の花　水鷗

花さかぬ桃や歌舞妓の脇躍　其角

江東の李由が祖父の懐旧の法事を
たのしむ経文題のなかれるを弥陀の
光明といふ事を

小服綿に光をやどせ弘法は　角上

椿まで枯て落ぬる花咲椿の南　游香

取あけて見るや椿のむくの窓　洞木

ちる椿のあまりもろさに続て見る　野坡

款冬 附躑躅 藤

山吹や垣に干したる簑一重　闇指

田家乃人に對して

山吹も散るか祭の鱠なます　洒堂

婿おこしにゆかし株や鍬のさき　雪芝

霧晴や穂麦にかゝる岸の花
春月　荊口

山の端をちらと見なり春の月　長崎 魯町

春雨 附 春雪解

抱よつさ草の社よりや春の雨　荊口

啼さえ調子合はよま春の雨　乃龍

春雨や唐丸あがる屋根のくろ　游刀

ちゝぶかし馬の武江の
旅店をまもとて附

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

ちる雨や出んとするうちの飯の鍋　桃首

淡雪や雨に追るゝ野の笠　風麦

はだらなる雪や雉の居る石乃辺たり　風瑶

汐干

乃あわり杭の浮洲もかくれぬ汐干哉　去来

不川よ富士の影ちよ志ほひ哉　廣林

雜春

出かはりやあるゝれ鍋るちま加帷　許六

花まるやすこき越ゆる桐乃苗　風睡

春もこの松のうろこやわら緑　土芳

さけろふや巌よ膝の掛ちかし　甑力

山吹花ちまきれのちつれや網代家　万乎

舟ゝ毎に鵜沼や明ちきや市の中　苔蘇

木の芽さく川雁かへる鵜やぬけ糸　均水

まつのはや菜の木の中のかはさき　正秀

之子の雛ちぬる屋まゝの他　仙化

引きる花中の字かるや田螺とり　支浪

三月尽

腰かけ白酒売れ名残かな　支考

歳旦

若の水やきれいに汲し上落水　少年　武仙

遊ぶ子の手まり花立所作　百歳

鶯や雛と賢る花て墨流く　尚白

蓬莱の本よりつゝひきし螺の貝　圃蒿

母まの錦絵川しや春の船　山峰

結よしは衣裳を顛倒すといふ文の文字出ちし侍れば

元日や有ふるき衣のうら表　千川

人も見ぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

明ぬる松の若めのうへに嬉しよめる君　其角

様の世の縁まつりや兼ね流く　嵐雪

常芽や左右の出てつゝひて松の陰　去来

鶯は橋をする蝸蜘かくる　土芳

去年一膝をまうけて

元川春やよく仕てる世間法　風瞳

元日やまうし時からも梅の花　猿雖

手折にもさす川越頃やあやめ艸　蔦雫

脊戸ちる柳に抱きつきや花の雲　卯喜

叢雲の紫はれても包尾の鋼のうるき　耕寫

鍬の音の夜さ手をおく細目かな　左拍

くれ川音や手を老後の白比丘尼　前川

枇杷の葉のうたに似せや細雨あ　斜嶺

世の葉や鮮もあれども花貴　山隣

濡いろや太あやうけの細目かな　任行

名月や事ともなきよ稲の穂の花　竹戸

我や白根とうつれ鏡すまえのより　是求

構葉や餅やもうしれる花志あと　沾爾

垂れしのみる花日に似つの花咲き　團角

夜之部

郭公

暁の雲をはなるゝやほとゝぎす　其角

ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草

声[illegible]や何を木陰にちかくおす　勇元

蜀魄啼ね[illegible]山　支考

時鳥の名や[illegible]　如雪

燕の居なし[illegible]　芒卜

淀よりも勢田よかりけらし子規

比るゝ山の杜鵑まて

順礼乃吟じて通りけるとや

諏訪かさいの森や中やどり　治風

木　附草花

橙や月みゝなれゐる木立　閑指

星しの姿ゝかりぬきの木かな　野荻

園中　二句

此中の古木を川れ柿の花　此筋

手拘のまへ木も柿の花盛かな　千川

姫百合や上よりさがる蛛の糸　李龍

題山家之百合

ゆかしやとまゝは隠る百合の花　支考

山まんまのくれて咲やとつゝと　尾頭

冷汁をさくまりしより杜若　沾圃

手のとゞかれぬ際ゝされし杜若　宇多都

あさがほや茄子の花を先さく　拙侯

ききちる花の花奥

昼がほや日もくれぬとも花盛　荷兮

夕顔や酔てかほ出す窓の穴　芭蕉

亡人

夕がほや裾ておさへて扇子る　嵐蘭

藻の花をちらしちらし寄る入江かな　孫香

蘭の花に飛さしれの濁りかな　はさみ

蓮の葉やとりとかくされ離れ　白雪

露おもし其夜蓮の躍かな　良品

風

朝露におくれて涼し風の上　芭蕉

姫ゆりや袖へ入ても匂ふらん　至暁

たくさん

虫れなる膳を出されぬ牡丹かな　風雪

子孫

京入や鳥羽の田植の帰る中　長崎 卯七

早乙女に結んでやらん笠の紐　闇指

飴とる菊の植おくれたる畠外　魚日

田植哥まてかゝる筋ばの風ひけ　童竹

一田づゝ行めぐりてや水の音　少枝

里の子が燕握る早苗かな　支考

螢

敬き火の間ふそろく飛ゝる哉　許六

三日月に草の螢は明にけり　野萩

納涼

涼しさや竹握り行藪づたひ　半残

咲花菓や席にあふて夕涼　睢然

涼りの床に居して

ちとせ萩や風にふかるゝ花の涼　史邦

涼しさや駕籠龍きその縄まくら　芭翠

石ばしや裏門明て夕涼ミ　長崎 杜年

涼しさに牛も尾振て川の中　万平

漫興　三句

腰かけて中に涼しき階子かな　洒堂

涼しさや縁より足をぶらさげる　支考

生酔をねらせてもどる涼しさよ　雪芝

ともし火の油を

茅屋にねまきて

涼風もおそしと窓のこゝろかな　游刀

さぞかし我中をぬけける涼み舩　仝

立かゝり人にまぎれてすゞみ哉　去来

黙雅にこまる涼しさや石の上　正秀

職人の帷子きたる涼みかな　土芳

涼しさや一重羽織の風通し　我眉

夜涼やむかひの人垣を月かゝす　里圃

盡る夜

かくれ家や照りかゞやかし庭の隅　野荻

李盛る人世のあつさの暑かな　万平

藪醫者の咄をきゝてとられし
よろこびて侍る

京にも居て捨て森冷の暑かな　正秀

瓜茸の池のあつさや梅ばらひ　乙州

蝶さゝる日盛はつし一きり　怒風

萩津ふ垣も志まらぬ暑哉　尾張 素覧

家のくちや暑さを月にわかつ成　我峯

はつ夕日や扇をさらし手洗そこ　下宮

積あけて暑さしのぐや寺の雨　卓袋

粽なから鮑も麻の袴つゝむ形　里圃

立寄れたせり川とこやの暑かな
舟の子　沾圃

筍に烟しかゝる岸の崩れかな　可誠

葭竹や烟の小川に庫裏の窓　曲翠

五月雨 附 夕立

声のなき鷺や雨にしてけり微雨の中　出羽 不玉

さみだれや蚕わづらふ桑の畑　芭蕉

五月雨や隣ふられぬ蝶たこひ　治圃

夕立まてさし合ぬり日傘　拙侯

白雨や蓮の葉ぬくぬく池の芦　苔蘇

夕立やちらしかけたる竹の皮　暁烏

中ハ見れ傘かる宿やまつ所　圃水

蝉

白雨や中宿りして蝉のこゑ　正秀

さ川と来て啼て去けり蝉の声　胡故

森の蝉涼しき声や行つきあり　乙州

蝉啼や松の揺る宮の時分　暁鳥

秋の月や潮こえて末津鐘　かの川を　葉蛉

雑夏

人参掃して手の動や世の團かな　杉風

虫の啼ふる宿業や乱しや寺子畑　荊口

夏痩も祓ひの中の出と川なり　イセ 如真

川枯よせて、

志ら焼や麦かしく魚て枝鏡　文鳥

異ノ草に永ららもや園の菜糕　蔦雫

夕扇もたれるも志ろるや酒もやし　水鴎

路くくさとゝろのきら世を
やしなひて

魚阿める幸も阿れ旅ららハ　馬莧

梅ざくさや箭れかさ暮く日の面　雪雲

澤沼や道付ら申る面のあと　野董

蝸牛たのり若のとゝ起きら出
吾の剣ぬをうしやせ　水鴎

高形よ天台森の花や簟　芭蕉

粘ころ季惟子かふる出る手くの
貪欲のとゝろしきなのさくさを
嫡きくよするなるたこの日の
納涼も扇一本みして世上に
宗る　惟然

惟子乃孫とひきやすし銭五百　支考

穐之部

名月

名月に麓の霧や田のくもり　はせを

名月の花かとみえて棉畠

ことしは伊賀の山中にして名月の
夜その二句をなしおきていつれか是
いつれか非ならんと侍りしに此間わか
つへからす月をまつ高根の雲ハ
はれにけりこゝろあるへき初時雨

仙台市図書館蔵書

く畫と因位なしのみとりやさしれ
枯麻を一夢様と見なされて平田
渺しと思ふこころを老杜が唯雪
かのくならせ以ぞのもつたへらるる
へし乃此比の棉たくけを言葉
多虜にして山もなやかなりけて今の
この山所の一篇に俤あらん月乃
らしれれやを存る出つるをとられ
出ちくれ斗にとおもひやられ
いはんは清香あり月に陰ありて
是も洗ぎ哥のあらそふれすまじ

老前ハ寂寞なさる物かし陰を風景に
も川をしうて是五句の外何乃是非を
きのうくるまをなさずきさく陰の人
なりびあるへし

支考評

名月の海より冷る田簔か雁　洒堂
明月や兎にかくれを飴色のつき　如行
ものゝしれん根かそん月見け　露沾

姫ゝ川あくまでひやゝかにけふの月　智月

名月やもとの座に人の取　閑指

明月や夕飯より花やすき客　渓雲

明るや一所吹く拵る鳴もなし　不玉

中切乃梨子筆の傳く月見かな　配力

名月や草のくゝり白き花　左柳

明月やまさきの相手の人もなし　圃水

松風の音も乱かくてかなしき月　山蜂

明月にや霞ぬ室の花に志ゐ須　風国

名月や四五人舟し帰婦家　需笑

老の身ととしの月も肉て　重友

明月にかくまゝ甲の花哀なり　泥芹
笹竹のふ笛もありてかくるの
落とき初ひまれかな

二見まで庭花の川かな月見かな　支考

茶子蔵と畑まで行月見かな　空牙

柿の名花見脇に月こぼれ　賀真

ひらるれち川とも霧ぬや峯の月　宮比

名月や里の(?)ひの手ま宋　本枝

場(?)に居て月見けりや遊機(?)　利合

明月や都へかへしね女中方　丹楓

明るも何もしらぬ寝の道　野萩

船入乃客よ(?)其川月見けり
隠川のあ(?)りよりかきくらして

舟待(?)の庵かとおけて月見けり　正秀

待宵の月に床しや宮(?)御　玄(?)

家の三老女ならぬ友ありし丈
外(?)盤ら秋しりて待く(?)し
あわれとひきて

姨捨を
関(?)のあるやゆかの月　曇桃

霧おきて月入あとや嫌の(?)　浴圃

するうつ月すゝむ梢かな　馬(?)

月(?)の(?)のあ(?)も扇下　里東

牧童

深川の末五本松といふ所に
船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜はわづかに闇の初かな　仝

いざよひは闇の間もなし[illegible]　猿雖

七夕

[illegible]の岸の[illegible]　唯然

[illegible]朝[illegible]　涼菟

船形の[illegible]　東潮

[illegible]　汶閣

[illegible]の[illegible]　乙州

立秋

[illegible]　宮川

秋[illegible]川や中[illegible]　左次

[illegible]　楊樹

[illegible]桔梗の[illegible]　倍右

女郎花ねびぬ馬骨の姿かな　洒子

まくらなき彩段の枝にかくれけり　馬莧

一筋を露にもちらし畑の岸　烏栗

弓固ぐる花なかれや萩すゝき　支浪

贈芭蕉庵

百合をまく莫蓉を練る余るか　風麦

にほふ姫のなやすさも花はしにけり　史邦

枯の原まるゝ捨てにくしや鶏頭花　万乎

鶏頭や雁の来る時なほあかし　芭蕉

鶏頭の盛る夜さへ月夜かな　至暁

折しや雨にこそはた萩の露　雪芝

萬花莫やおもへば動く秋の風　荻分

山人の豆枕をさされ鶯かな　加賀山中　桃妖

風無よ長く居れり鵲の　杉下

秋ぞかし

秋新の蓋わする人の名月かな　田上尼

あきくれの通ふて来る根なしる　闌指
みゝもみはさゝいやもて湯の舟　風麦
朝皃にしほれし人や鬘帽子　其角

虫 附鳥

きりぎりす傍に経よむゆふべかな　可南
竈馬や顔に飛つくくらかり棚　小枝
火の消て胴へやよふか虫のおとし　正秀
秋の夜や夢と鰐とをきゝしす　水鷗
この虫や形に似合し有の紅　杜若
蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸
蟷螂や腹をいやしやけるのもと　萬宋
蓮の実に抜さしこん隣の児　示峰
ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草
鳫かねにゆるゝ浦の苫屋けり　馬見
鶺鴒や走り負ては角田川　氷固
麦の穂をきえあふ限や峰鶉　支考
老の名のありともしらで四十雀　芭蕉

野分

秋かぜや二番たばこのねらひ時　游刀

雀子の髭も黒むや秋の風　式之

何なりとからげかし行秋の風　支考

松の葉や細きにも似ず秋のかぜ　風国

きのふから草の葉ずゑの吹くかはる　圃燕

ねんころや野分にふかれもしらず　丸石

あれ〳〵て末は海行野分哉　猿雖

稲妻

独いて留守ものすごし稲の殿　一東

稲妻やかほのところが薄の穂　宗比

ゆふかけや稲つま戻る雲の端　土芳

稲妻や闇の方行五位の声　芭蕉

木實 附菌

椎の木の落て飛けり石かわけ　為有

炭焼に澁柿たのむ便りかな　玄虎

秋空や日和くるはす柿のいろ　洒堂

はねしやぶ草をもろく椿ゝ汁　李由

初茸や塩にも漬す一盛　沾圃

伊賀の山中に阿叟の
寓居を訪ひて

松茸や都に近き山の形　惟然

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後屋の塀にすれたり村紅葉　小鰹

麻

風すかに夜明の麻や風の音　風睡

麻かつぐよ麻かりどころ手わざ小　一酌

農業

起しをし人を迯けり鳶の　ひと　車庸

木の下に種もちみ植鶏の畑　買山

小筑の年従よ
らうしをとつれて

さあへけるなもあつまりし寺の桶　如雪

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉
早稲刈て落つくかたや小百姓　乃龍
山雀のわたりて鳴や霧の稲　斗従
居りよさに河原鶸来る小菜畠　支考
一霜の寒や芋のずんど刈　仝
肌寒き始にあかし蕎麦のくき　惟然
百なりていくつか抱を居かし　木節

大津河原にあそびて拐浪といふものゝ縁によりてなひろうす

そのいろの風一風吹けしはの種　沾圃

菊

荷草二百十日も恙なし　蕉牙
色わけし花かと見ゆる菊の玉牡丹　濁子
黄木綿の花に寒しき菊の花　支考

野盃扉

折られたる山路の菊の家　元峯
借りかけし誰の明けれの菊
暮の秋　北枝

唐黍や背戸ふてゆる秋の空　野水

行秋を鼓弓の糸の恨かな　乙州

行あきや手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雑

又六十海ぎはのやして殺一ッ　之道

栗かちの花や宮居の松の中　團友

あら玉の峠をおちし月見かな　畦止

捨る扇やあれ閉かる秋の風　卬皐

名ごろひに霰のこぼるゝ　菊外

兄弟や梢ハ家の蕎麦あらし

柿のこぞみに燒てこ墓てん　燕着　蒹子

むかし馬も宮に骸骨かくも

の笛鼓をりきて絶はる　万幸

なまき畫て鎌倉の桜かり

こ年さりあつしに生るかり

あかうなれたとハこれおとひ　東門　宗波

よ降しんやかの髑髏を梳

ゆきして猿よ喜えはつ哉

かくさるゝも只との生かをを
きらめきくしものかぶり
稲つ畑やうかれの雪ろか芦の穂
支考

冬之部

時雨附霜

この比の垣の結目やはつ時雨　野坡

志ぐるゝや黒木つむ屋の窓あかり　小枝

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨やかとく川まろく見おくり　露沾

染しらぬ中橋の草化者嬰加蔵　馬見

平押にならぬ田ゝもある時雨かな　野明

柴売やとゞくれの町廻り　南指

椀売も出よ芳野の初時雨　空牙

竈のもてなす出時雨かな　乙宥

うちむれや焼みもつる一しくれ　鶏口

為に垂て番匠をぬらす時雨けり　野荻

柿色も日和もなしや時雨　露川

[illegible]しくれて星を落す時雨　里圃

淡くきてそれ[illegible]の声のまくさ
月[illegible]てあ[illegible]しくれ

沖西の鮭目くり出時雨ヶ時　沾圃

川[illegible]やかのおかくれの孫　水鯤

雁[illegible]一[illegible]しれ[illegible]の空　支考

元禄辛酉の秋
九月芳堂東園に遊

[illegible]の[illegible]月のゆかし
まつ[illegible]たつ[illegible]の[illegible]されは
[illegible]も[illegible]

まして附句にも流行侍る言くは
みやこの川そ展重陽のゝ流
たよりにもあくるまた秋
菊作りしてくしきすさまし
れなるを支へかたかる

菊の香や庭に切れたる履の底　　芭蕉

樋の口や起あがりたる菊の露　　其角

菊の氣味ふかき境や藪の中　　桃隣

八専の雨やはつまる菊の露　　沾圃

何鳥のかくしはさん菊の枝　　万乎

菊畠客も圍炉をはなれけり　　馬莧

葉菊の隠士は淵明の翁を歌し
をかふれは菊も籬のあたりに候
そせはきゝきはもふれは存
もし今の菊をおもひて
ものつくりたる菊はといふ
家の菊作りして琴なりのけ
ころにあらはやとて人見竹洞
老人菊琴を送られしより
是は夕月し　さかさ氣なりて
あるまじき醜きにあるを
ほのさへあらせて

こゝろしらぬ琵琶や椎しらぬ菊の花　幸亭

草

水仙や孫娘か結ふ月の透影　曲翠

なつ長凄く咲や菊かしらの水仙　氷固

水仙のしほれかゝりや露かしこ　唯然

花蕊趙南のうちかけ

山家住家の髭よおもふ

一露もこほさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花さえしり向く帰り花　車庸

冬梅の出る川端ゝ川や鳥のあそ　土芳

山茶花も落てや雪の花襟　房笠

木葉　附　冬枯

おもひなし木の葉ちりゝゝ松の声　沾徳

日生きくんで江の鰯出つゝ山落葉小　露沾

冬川や木の葉出し見ゆるその方　唯然

樵より見えわたる木の葉かな　枳風

　なら坂の落葉をふみて

ちるよりも先あれてころ落葉かな　一道

枯なから散らぬや木の葉たへん　杉風

牛の行道も枯野のなかうち　桃醉

冬枯に来てころころなを　乃龍

鶯は枯野の中の川で鳴きもなり　利牛

関を越え枯てのちまた　支考

木からしや色にも見えす散もせす

凩や背中ふかるゝ牛乃あゆみ　風竹

木枯や刈田の畔の鉄気水　惟然

こからしやかたまりかゝる牛の角　塵生

夷講

ゑひす講酢賣に袴着せにけり　芭蕉

恵比須講猫聲も鴨に似たり　利合

鳥 附いを

乃やこの海さえて

塵浜にかゝる月もなし浦の影　向空

追付て寄にくる千鳥の事　蔦京

やまらとる庚申やる死雨夜　古亭

入海や碇の釜に鳴千鳥　句拾

鷺はほしくてぬらし鴨の足　芭蕉

川鴨も大追ひ立はしく飛　乍木

牧沒にころひのつふ生海鼠かな　二人 利雲

うつしやく海月に交るかまくら　車庸

見く透や子持ひめの氷　住水

一塩にそ川白魚や雪の前　杉風

おく内川や膓をかしへて降霰　拙候

杜夫魚も河豚の大さよそ水上に浮ふ

趣の川にのゝあるらしをかり

冬月 附衾

喰ゝの也門賣ありくみゝの月　里圃

あゝ猫のかけぬる軒やみゝの月　太子

何ともと霧つるまでやり[illegible]すゝ　少春

みな色や門をかくれぬ江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

[illegible]しきゝあつかひを[illegible]る火箸かな　少年 桃先

白雲や月をもらひし[illegible]　同木

雪

はつ雪や門に橋あり夕まぐれ　其角

[illegible]ゝや月雪すゝむ酒の味　仝

雪あられ心のかはる[illegible]汁　杉東

鷦鷯[illegible]とまるくもれ雪　祐甫

雪垣やまくらね人の[illegible]かぜ　馬莧

ぬくゝつ身も[illegible]屋ゆふかのさる　支考

降雪や雪[illegible]すき俵　圃吟

足もとの雪ふみや用捨のなかれ　文子

髪な判を降する雪のちらしけ　陽和

伊賀大和さかゆる山や雪の花　配力

神楽

おかみ来に歯も吟する寒かれ　史邦

御さくらよ

今日附やとなしく尻の宇の神在　路草

御めくれ千鮭買ます先めくり　馬覚

嫁入の門も見よれと待さくよ　許六

根をおりし尻りの節たし羊　浜圓

煤掃 附 歳暮

煤はきや鼠追ゆく黒鴉の中　孫香

煤掃や肴のかかる者をしけ　黄逸 求鷺

おさなきも儀の物や煤払　馬覚

蝶たちやわすれてかへる跡さびしき　ミノ　言如

煤掃や折敷一枚流しけれ　唯然

餅つきや火をかいてわる男部屋　佐水

餅はさやあくしの手ころ鶴のとや　嵐蝶

もち搗の手伝ひあふや小山伏　馬佛

歳暮　附冬季ハ衣配

さ縁ふ尾道も備後の市の宿　角之

門神やおさきてまつ手の洗ひ髪　はうし

賣ものやとんても出る手の暮の　草士

猿もまよふありさま尾やしの暮　東来

大手や款冬さきよる北指宿の　万手

袴きぬ紬のもありとしの暮　李由

年の市衒子呼んて相撲との　其角

中のかん尺小豆も市の備中小　正秀

引摺ふ一はふ臼やのしの暮　孫子

桶の桶のおもしろあしたのこれ　猿雖

天鵝毛のきぬきかして年の暮　惟然

貧狭に筆を[illegible]てやくしの暮

けふは圖司呂丸か羽黒より京に
のぼるとて伊勢にまかりて侍りし
かへさのわかれの[illegible]かく法をとひ

[illegible]して今年たのし人をとなりし

盗人にあふたよもあり年の暮　芭蕉

余所に住てやんすの[illegible]の[illegible]　支考

[illegible]れ[illegible]所[illegible]身ぬ年の中　土芳

雪や弱りて[illegible]霧の中　高白

[illegible]の[illegible]子な[illegible]　丗年　桃後

哉[illegible]の子[illegible]川き[illegible]　山蜂

一[illegible]て静[illegible]除[illegible]の鶏　利合

雜之

[illegible]原風[illegible]を挽[illegible]　野[illegible]

[illegible]風[illegible]の端　土芳

床のあ[illegible]のあ[illegible]かれ[illegible]　李下

夜ながら伏村の長はなし　仙杖
露しらぬ溜めげや土龍　圃仙
火燵より寝なかけばあまりは　雪堂
山陰や猿か尻抓く見る月　口谷
短夜に人衆りの根のあさまり　佐圃
菊刈や見しめく影の無新　杉風

釈教之部 附追善 哀傷

涅槃

涅槃像あるよき貝多羅は　ふみてん　法圃
孫もん命も般若手合る陣羽の　ぢ　足蕉
山寺や猫寝ざ派るねぶし像　不撤
貪福のあしたまる涅槃像　山蜂

灌佛

灌仏やたらしたる井戸のやうき　曲翠

葵花や御ゆるされて二三日　不玉

灌仏や釈迦と提婆を従弟とし　之道

魂祭

聆ねもとなく水くさし魂まつり　嵐雪

稀にきのあふさしやくさ魂祭　去来

當は使者坊主にも魂祭　洒堂

甲戌の冬大津に侍しときの
かゝることより消息ありけれ
老母に伴りて盆會まいらんとて

家はみな杖にしら髪の墓参　芭蕉

悼少年　二句

うつくしき麻木の箸も折られ　惟然

その数きまりぬその夢の秋の風　支考

ほいなく
詠草に残て

青のちやうちん稲妻のちらちらその間　木節

ちらうや稀妻やとふ桶の水　支梁

陪乾舎

柚も柿もおらがまれかゝり陪乾舎　沾圃

臘八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六

大師講

何の木のあれかのあと山かみる　如行

雜題

洛東の真如堂にして
善光寺如来開帳の時

涼しくも野山にみつる念仏哉　去来

みゝとを神さまや三なさきしけり　智月

けしの花

けし物や家も所もまりて在世　乙州

そのかみに川越向ふや冨士まうて　李由

手まはしに朝の間涼し夏念仏　野坡

食堂に雀啼なり夕すゞみ　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏ばせを翁の
別をおくりて

麦ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

別るゝや柿喰ひながら坂の上　惟然

許六ゟ
木曽路におもむく時

旅人の心にも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より
古郷に帰るに付

嵐やゝも山の芋はこびけり　丈草

鮎の子の白魚送る別かな　芭蕉

甲斐のゝの山に詣る付
ひと雑のらせにかゝりて

手よりて牛に乗りけるも驚く七所　木吉

雛つばめや浮世をみるゝ縁に　抱人

みへもなくつゝむゝ川鰯や旅の宿　野径

ちかの國に趣くよし付
そらのくのさくひきとて

あ禿らき谷地ばかりけり出羽に　乙翁

十國より中も小清水ちらぬ秋の風　許六

大名の椿肩にも旅する京かな　仝

ゝ人ゝ送る

とろし帰も第まそら河寂盆の猿　巴丈

はるゝまと出て宿出る木曽路かな　猿雛

明月の色かはらず　旅姿　我峯

おくられて湖海あつし舟の馬　史邦

田園の思ひ去しも斯し江戸の
くらしに入りて

文藏の扉あけて出る秋凉し　古人 呂丸

我蒲團つゝみ丸猪の寝くら哉　沾圃

常陸の國ほしあひとらむ所は
引ゑらてやとり求んとせしに
そのあるじ旅なるあつことて宿を
くさくされて一夜別時の軒の
下にかりねして
露しるして

猿の子の猿ゟ情や森に迷ひ　支考

山川の也道のくろみ松もと　仝

元禄壬午の冬粟津の草庵
より武江におもむくとて膳所
の驛にいきりて

宿かりて名を名乗らするしくれ哉　丈艸

續猿蓑ハ芭蕉翁乃一派乃中にて
何人の撰といふ事をしらず近代の
俳伊賀之翁乃兄松尾にゆかり
此稀本あり東ニ残りしを得て
漸よう冊子のむかし事をあつめん
世ニ廣めむとするを聞て紙つり書肆
或ハ異けしむといふ其人ニおくれは
く傳ふは翁の手なりけり

一こまかなる手一切てみな我先生せし
乃書之ちよ紙をいくさ古きなり
とおきも秘之

元禄十一寅　かつか
五月吉日　一陀意亭

國學院
36 3 10